

つながりのあした ウイズコロナの時代に

第2部 ケアのかたち ④ 揺らぐ日常

孤立が認知症リスクに

る生活の変化を挙げた。家族によると、異変が表れたのは昨年夏ごろだった。「上の階や隣の部屋の人が悪口を言っている。舌打ちも聞こえる」。倉敷市に住む長女(56)に泣くような声で電話してきた。財布の置き場所が分からない、家の鍵が見つからない…。廊下に大男が立っていると訴えることもあった。

感染拡大に伴う昨春の緊急事態宣言以降、中島は「コロナが怖い」と毎月開いていた友人とのランチ会を取りやめた。日々の買い物は最小限にとどめ、長女宅に行くことや近所の体操教室への参加も控え、ほとんど自宅にこもって過ごすようになった。

状況を踏まえ、松岡はケアプラン(介護計画)をまとめた。重視したのは「人

とのつながり」だった。週3回はデイサービスに通って、利用者や職員と会話し、体を動かす。週2回はホームヘルパーの力を借り、松岡も月1回訪問する。週末は家族に協力してもらおう。感染を恐れ、人と会うことやデイサービスなどの外出を敬遠する高齢者もいる。日々実感しているコロナ禍でのケアの難しさだ。中島の場合は、本人に「このままではいけない」との思いが強く、不安を抱えながらもプランに添った生活を続けた。その結果、症状は落ち着いてきた。

川崎医科大学総合医療センターの物忘れ外来では昨秋以降、中島のように認知症と診断される新規患者は前年同月比2、3割増のペースという。さらに日本老年医学会や広島大などが昨年6月、全国の医療・介護施設やケアマネ

に実施した緊急調査では、認知症患者

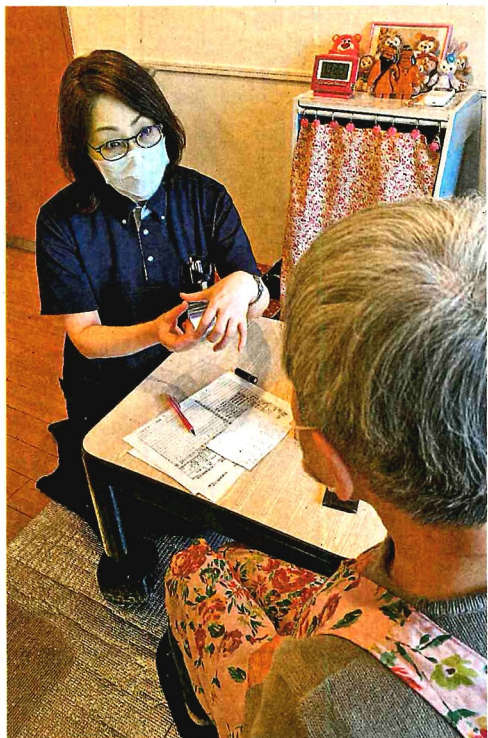
に認知機能や身体活動の低下などの「影響が生じている」との回答が4割に上った。

「人との交流や適度な運動の機会が失われた。それが認知症の発症や進行につながっていると考えられるのでは」と調査を担当した広島大学院医系科学研究科教授の石井伸弥(44)は老年医学。認知症だけでなく、体を動かさなくなると筋肉量が低下し、要介護の前段階「フレイル(虚弱)」に進む危険性もあるという。

時代とともに核家族化が進み、地域コミュニティも希薄になったとされる中で、社会課題の一つとして横たわり続けてきた「高齢者の孤立」。健康面での大きなリスクになることがコロナ禍でより鮮明になった。

「高齢者を支え切れていない実態があぶりだされた。誰ひとり取り残さない共生社会に向けての本気度が今、問われている」。石井はそう訴え、持続可能な医療・介護サービス体制の確立や地域での支え合いのネットワークづくりの必要性を挙げる。超高齢時代に突入したわが国に課せられた「宿題」であり、災禍での動きが実現への試金石になる。

「春には近所を散歩しようと思っ
とるんよ。松岡さんのおかげ」。岡
山市内のマンションの一室。中島桂
子(81)は仮名。笑顔を見せた。3
月上旬、1人暮らしのこの部屋を訪
ねたケアマネジャー(介護支援専門
員)の松岡美保(56)は「表情も明る
くなくて。半年前とは全然違うなあ
と目を細めた。
2人が出会ったのは昨年9月、川
崎医科大学総合医療センター(同市北
区)だった。中島が「物忘れ外来」
を初めて受診。医師の診察後、松岡
と面談したが、その日の日付が分か
らず、自分の住所や生年月日も即答
できない状態だった。
「アルツハイマー型認知症」と医
師は診断した。考えられる要因の一
つとして新型コロナウイルス禍によ



中島さん=仮名=の自宅で暮らして
ぶりを尋ねるケアマネジャーの松
岡さん。認知症対策で「人とのつ
ながり」を重視する=岡山市北区

井上光悦
文中敬称略